Salon　d’AALA
サロン　　ダーラ
2019. 2. 1.　　No.111

北京滞在記

加藤　明美

去年の８月、９月に引き続き１０月は北京の秋天、青空のひろがる美しい季節に左萍萍さんと、その家族との旧交を温める為に、北京へ飛び立ちました。

ポプラ並木は、丁度一ヶ月前に訪れたウラジオストックと同じほどに、上の方が美しく黄葉していました。

サロン.ダーラ№.１０２に登場した祖父を天津で亡くした方で、京都府立医科大学で理学博士を取得された萍萍さんです。

彼女のマンションに１４日間滞在しました。１５日以上は、ビザが必要となるのです。毎年行く約束でしたが，中々思うようにゆかず、五年振りです。

＜但し一昨年は、一月に上海の知人の車で、広州まで、高速道路を利用して往復３０００㎞を駆け抜けました。１０日間のドライブで見えてきたのは、農村に突如として現れた、あちこちに建つ何十棟ものマンションです。ほとんどが空き室です。農民の大移動なのでしょうか？＞

彼女の住んでいる「九華山荘」は、いわゆる「サ，高、住」型（サービス付き、高齢者向き住宅）の団地で、６０歳以上の人が一万人ほど住んでおられます。

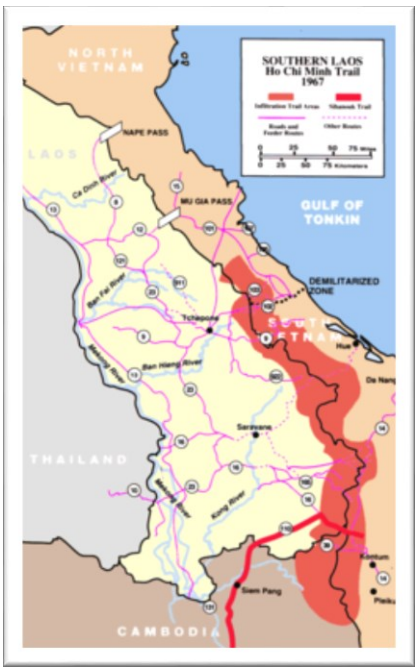
場所は、北京市内から北西へ、万里の長城の八達嶺の中間ぐらいに位置し、１万坪の広さの中には、ここだけの病院もあります。世界五ヶ国の不動産社が、共同で開発し、北京では有名な温泉もあります。広い公園の中には、１４階建てのマンションが点在して建ち、閑静な団地です。建物は、年金によってレベルがあるようです。一応契約は、３０年と聞きました。この中心地の建物には、高いレベルを目指しておられる各種の倶楽部があります。囲碁、将棋を始め、漢詩、書道、絵画、写真、クラシック音楽を奏でる人、クラシックバレー、オペラ，等々各々、天井の高い立派な部屋で、日夜研鑽されている方も多くおられるようです。そして週一度の映画会もあります。

各々の建物の一階は、看護師が駐在しているフロントがあり、食堂もあります。食堂では、希望者は前もって三食の券を買って予約をしておきます。食事時になれば、各自携行用の四段重ねで、ステンレス製の丸い弁当箱を持って行き、そこに入れ、夫婦、親子、お手伝いさん，或いは本人一人分等持ち帰って自宅で食されます。或いは、広い、明るい景色のよい食堂で食べられる方々もおられます。でも料理がマンネリ化しているともいわれ、自宅でお料理をされる方々が大半です。

この団地の中には、売店などなく、週に二回スーパーの送迎車が買い物店へと誘われます。なかには、近くの農地を借りて新鮮な野菜作りをされておられる人もおりました。農薬が心配だからと。若い女性、中年の女性が、食事時になったら携行弁当箱を持って来られるので不思議でした。尋ねますと、介護をする人達だったのです。中国では、介護者といわず、「保母（パオムー）」と言い、彼女たちは、遠く離れた四川省や湖南省等

生活環境の厳しい地方から出稼ぎに来られているのです。子供達は、親等に預けて。彼女たちの夫も、また遠く出稼ぎにいかれているのが大半です。ですから間もなく訪れる春節（今年は２月５日）には、中国全土が大移動です。探親（タンチン）といって、家族、親戚を訪問することが大イベントなのです。
四川省の 40 代の女性は、私にさかんに日本での介護の仕事を紹介してと言われました。20 年程前に蘇州の友人に介護施設を作りたい旨を話すと、儒教の国だから無理と言われたのを思い出しました。世の中の変化には驚きですが、都会から遠く離れたり，又高速道路の通らない厳しい自然の中での人達は、収入源を求めて、出稼ぎに移動されるのは、昔も今も変わらぬ中国事情です。貧富の差が縮まらない原因のひとつでもあるのでしょう。
　萍萍さん達とは、共に生活をし、胸一杯の思い出が又増えました。たまたまオーストラリアから帰国されていた萍萍の弟さん家族とも友情を深めました。
　北京へ到着した翌日、１０人程の歓迎宴を受け、私は、帰国の前日近くのレストランで、もちろん中華料理で答礼宴をしました。萍萍のお母さんは、車椅子で隣席して下さり、共に熱い握手をして別れを惜しみました。

海のホーチミンルートの話　　成 田　光 生



前号の続き。
　1961 年ころ、私たち(南部)の仲間 6 人を引き抜いて、海を渡って北部に行くよう命令が出ましたが、それは完全に秘密の命令でした。省の一部の幹部しか知りませんでした。
数人が任務を解かれ、離脱する・・私は妻に打ち明けませんでした。
1964 年末、9 回目の航海でチャビンの船着場に戻りました。今回上級は、私たち夫婦を会わせるようにしました。森の中の「幸福の部屋」で二日間過ごしました。妻は回り道をして戻りました。10 年以上経った 1975 年、南部が開放されて初めて知りました。
妻の妊娠・出産を。解放軍の妻が「ゆきずりの妊娠です」両親は大声をあげてののしりましたが、耐えるしかありません。
　一人の女性がひそかにすべてを耐えた。完全に孤独で、10 年以上の年月が続いた。その当時のきわめて神聖な一つのことがら、東海（南シナ海）の航路の秘密を歯をくいしばって頑固に守り抜いた。そうして、10 年の月日が流れ、南部解放の後、私は戻りました。妻子に会いました。
　もうひとつ。1972 年初め、第 371 団は東海上での武器輸送を継続するが、完全に違った「合法的な活動」です。「公然の場」に出て、敵の支配地域で、にせの証明書で生活し、公然と航海する船を使います。私たちは網を流して漁をするふりをしました。二匹の大きな魚を捕らえました。船着場の仲間たちと一緒に荷(武器)下ろしをしました。夜の 8 時から朝の 3 時までに 30 トン全部を済ませました。
　300 ページ近い本のごく一部を紹介しましたが、秘密を守ることの困難さ、敵の支配下での反撃の準備の周到さを感じてください。これらの英雄的な努力の上にベトナム民族解放が勝ち取られたのです。ベトナムは大陸の端です。他民族との複雑な関係は何千年も続いています。国内にも多数の少数民族がいます。その上で「民族自決の原則」を理解したいと思います。

モロッコの女性に日本語を教える中で

阿比留　高広

モロッコのヒンドさんとは、気楽におしゃべりしながらわからない言葉や文化について情報交換をしています。私がアラビア語を勉強していることもあって、アフリカ・アラブの文化についても交流ができています。さらに彼女はフランス生活も長く、ヨーロッパの視点も持ち合わせています。

好きな日本語の言葉は「しょうがない」や「仕方ない」だそうです。以前にも日本の会社で半年間ほど働いた時に日本の異文化に驚きながらも適応し、その後も日本に対するイメージは良くなる一方だったそうで、お互いの文化を深くまで理解し、尊重する力を感じました。日本語独特の代表的な表現としての「しかたない」という意味合いをもしかしたら日本人よりも論理的に理解しているのかもしれません。また、カレンダーでなぜ 14 日、24 日だけ他と読み方が違うのかなど、私自身も言われて気づくような素朴でよい質問もありました。

また、彼女は好奇心から日本以外にも韓国や台湾など近隣諸国も旅行したそうです。ちなみに中国には興味がなくいかないなど、こだわりもあるようです。韓国旅行の際には、韓国の若者に日本に留学していることを伝えると彼女に対する態度が急に悪化したそうです。日韓の微妙な関係をあまり理解していない彼女にとってはかなりショックな出来事だったようです。私たちも、例えばイスラムの国の人々には当たり前のことでも勘違いしていることは多いかもしれません。たとえば、イスラム教を国教としている国の中でもイスラム教徒でない人がたくさんいて、普通に仲良く生活していることを考えると、理屈では理解できても日本人のイメージとは大きなかい離がある気はします。もちろん、イスラム教徒もそうでない人も、その国の宗教を学ぶということでしっかりと勉強はしていることは事実ですが。

差別について彼女は、フランスと日本の外国人に対する差別は異なっているといいます。フランスでは外国人でも彼女のように長く住み、言語にも違和感が少ないと他と変わらず接してくれるそうですが、日本ではどれだけ日本語がうまく話せても、見た目からすでに外国人（つまり自分たちとは違う人）として認識されてしまうということです。むしろ見た目が日本人と大きく違えば、日本語がうまければうまいほど驚かれるというのはいわれてみると日本人として心当たりがあります。ただ、もちろんそうした日本人に悪気はないこともわかるそうなのですが、私たちのよく使う「日本語がお上手ですね」などの言葉にも、相手に差別意識を感じさせる可能性があることは私たちも気をつけたほうがいいのかもしれません。フランスと日本の外国人との付き合いの歴史の深さも考えさせられます。

フ　ラ　ッ　シ　ュ

香港＝時事

マカオ立法会(議会)で 24 日夜、「中国国家への侮辱行為」に罰則を科す国家条例が賛成多数で成立しました。国家の替え歌など意図的な侮辱行為が禁じられ、違反者には最高 3 年の懲役刑か、2000～1 万パタカ（約 2 万 7000～14 万円）の罰金が科されます。

ブラジルダム決壊死者５８人に

ブラジル南東部ミナスジェライス州ブルマジーニョ市で起きた資源大手バーレ社が所有する鉱山ダム決壊事故による死者は２７日、５８人に達しました。ロイター通信が伝えました。州政府高官によると、依然として３００人以上が行方不明になっています。

【しんぶん赤旗より転載】

沖縄平和ツアーに参加して

三品　洋子

12 月 2 日～5 日、京都退職教職員の会沖縄平和ツアーに参加しました。沖縄は 27℃夏の暑さの中、那覇市内の国際通りにはクリスマスのイルミネーションが飾られていました。現地の平和ガイドさんの案内で普天間基地・嘉手納基地、伊江島、ハンセン病施設の愛楽園、辺野古、読谷村、南部戦跡アブチラガマ、ひめゆりの塔を訪れ、また沖縄退職教職員の方々との交流など多彩な 4 日間でした。デニー知事誕生後の沖縄で、基地の現状や戦前から続いた闘いの歴史、これからの課題など多くのことを学び美味しい沖縄料理を堪能して帰ってきました。

今回のツアーでは伊江島に渡り、畳 1 畳に 2 発の銃弾が撃ち込まれたほど地獄の戦場と化した島の歴史を知ることができました。平坦な地形が飛行場建設の適地となり、子ども・老人・女性にかかわらず一般住民が動員され、日本兵による住民虐殺やガマでの集団自決など伊江島は「沖縄戦の縮図」と言われています。戦後においても、米軍によって「銃剣とブルトーザー」による土地収奪が行われ、村民は無法で人権を無視した土地接収に対して闘い「島ぐるみ」土地闘争へとつながっていきました。今も島の 35%が米軍用地で占められフェンスが張り巡らされ広大な土地が広がっていました。2 年間終戦を知らずにガジマルで樹上生活をしていた 2 人の敗残兵がモデルの井上ひさしによる戯曲はこの島が舞台で、今もなお命のガジマルとして残っています。

3 日目に辺野古キャンプ・シュワブのゲート前で土砂を運び込むダンプカーを止めるため座り込みをしました。前日に名護市安和にある琉球セメントの桟橋から民間業者が土砂の積み出しを始めその抗議行動に地元の人は行き、ゲート前は私たち 20 数名が大半でした。
土砂投入は違法であり許せないとマイクで呼びかける中、プラカードを持ち座り込み行動をしている私たちの前に若い警察の機動隊は無表情で立ちはだかりました。ダンプカーの列が近づき、立ち退くように指示され国道の向かい側に移動して抗議を続けました。現地の人の中には機動隊に抱えられて移動させられる人もいました。毎日座り込みに来ている高齢の女性、また京大職員から沖縄に移住して 11 期間議員を続けている 78 歳の大城敬人さんは京都から来たというと懐かしそうに話かけてくださいました。

すべての人が排除されるとゲートが開き、抗議の声が響く中、採石を積んだダンプカーが次々と入っていき、およそ 100 台、国道にはダンプの長蛇の列が続いていました。民意を無視した国家権力に対する怒りがこみあげてきます。その中でもあきらめずに声を上げ続けることの大切さを沖縄の人々から学びました。辺野古団結小屋前で、京都から移住し活動されている北上田毅さんは新基地建設をめぐる状況について、大浦湾工事計画における軟弱地盤の問題を指摘しこの工事は頓挫すると話されていました。